【最優秀賞】

『水の惑星の未来は私たちが創る』

豊橋市立本郷中学校　三年　　中村　光里

「ひかちゃん、ほら新ものだよ！」

曽祖母がとれたてのキュウリを六本、しわくちゃに笑いながら手渡してくれたので、そのまま仏壇まで走って行ってお供えをし、手を合わせてご先祖様に報告した後、さっと水洗いしてパキッと食べる。最高にうまい。同居している曽祖母は九十二歳。耳は遠く腰は曲がっているが現役バリバリで畑仕事をしている。野菜作りの名人で何種類もの野菜を栽培してくれているので、うちで買うのはキノコともやしくらいだ。祖父母と両親は水耕栽培でトマト、田んぼでは米も作っている。食べ物にはほとんど困らない。本当に有難いことだ。

「令和になってから、コロナや災害や戦争で悲しいことばっかりだねえ…。」

曽祖母がテレビの前でつぶやいた。昭和初期の水道のない不便な暮らしと今、便利になった引き換えに環境破壊などが進み地球が悲鳴をあげている事を、経験から知っている重みのある言葉だった。

野菜作りにはもちろん、動植物が生きていくには、水が欠かせない。

水の惑星と言われる地球には水が豊富にある。しかし、私達が使える水の量はその中のたった0.01パーセントしかないのだ。今後世界の四十億人にも上る人が水不足に陥る可能性があるという報告がある。毎年百五十万人を超える子供達が安全な水の不足により感染症にかかっているというデータもある。安全な飲料水を得られず毎日4900人以上の子供が亡くなっているという過酷な現実、水源の上流国と下流国の水の使用を巡る紛争の頻発、海洋汚染、更には気候変動による水不足や水災害も相次ぐようになった。水の惑星が抱える水問題は沢山ある。

日本も例外ではない。気候変動による水災害だけではなく、実は「隠れた水不足」であるということだ。蛇口をひねれば安全な水が出るので水不足と実感している人はほとんどいないだろう。しかし、私達の生活の多くは海外からの輸入に頼っている。その工業製品や農作物等、それらを生産するために多くの水を使用している。つまりその生産に必要な水を他国に肩代わりしてもらっているということになるのだ。世界が水不足に陥れば、他国の水に依存していた私達の生活は甚大なダメージを受けるだろう。

曽祖母に昔の生活の様子を聞いてみた。家には水道が無く井戸の水を飲食に使い、雨水で食器を洗って、風呂の水で洗濯をしていたと聞いた。戦時中中学二年生だった時に、学徒動員で工場の寮に居た時、爆撃によって水道が使えなくなって困ったそうだ。他には台風が来る度に川が氾濫して大変だった等、水に関しての苦労話が次々と出てきた。

経験談を聞き、現在水不足で困っている国への支援と、今後予想されている世界的な水不足への対策はどうすれば良いか考えてみた。

海水淡水化技術、安全に各家庭や施設に届ける技術、使用した水をきれいにして自然に返す下水処理技術等、貴重な水を安全に循環させる技術を日本は持っている。この技術を提供し、水不足に悩む国を支援していかなければならない。

そして、私達が個人としてできることは、世界の水問題から目を背けずしっかりと見て知ること、日常生活での節水を心掛けること、できるだけ国産の製品や食品を使い自給率を上げること等である。小さな努力の積み重ねは大きな力になると私は信じている。

水の惑星の住人がその「水」の恩恵を共有出来るように、世界中の人々が一緒になって真剣に考え行動しなければならない。

先人たちの経験や知恵を継承しながら、世界中の人と手をとり合い、新しい未来を私達みんなで創ろう。

「幸せだね。」と言えるように。